

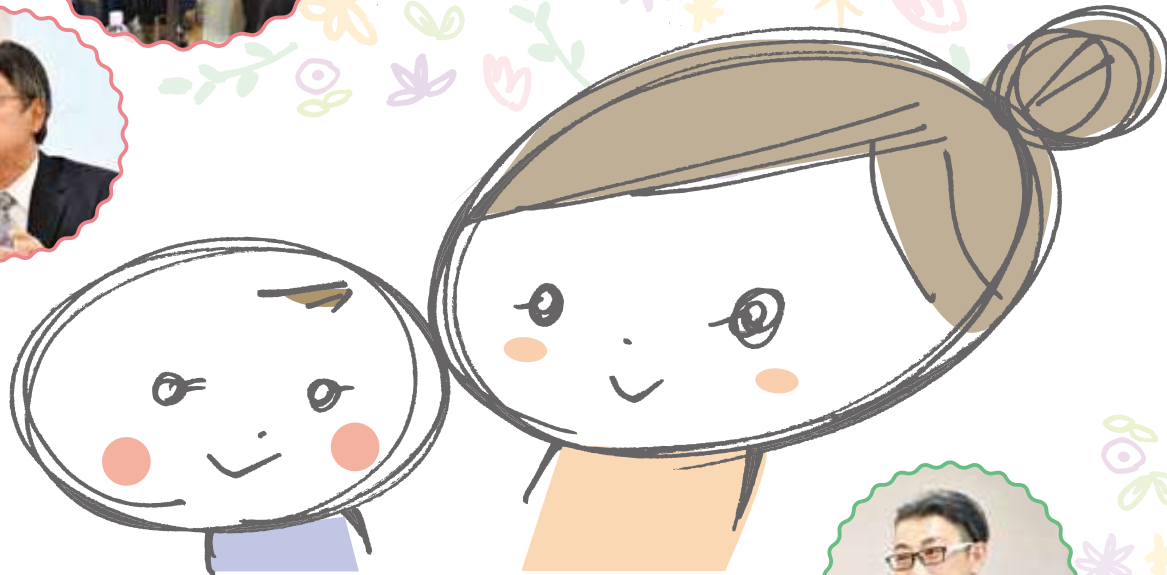
アタッチメント・ライフ

第10回 記念大会

育児セラピスト全国大会 報告書

～この10年の子育て環境を振り返り、これからの10年を見据える～

東京



大阪



一般社団法人

日本アタッチメント育児協会

第 10 回 育児セラピスト全国大会 in2019

～この 10 年の子育て環境を振り返り、これからの 10 年を見据える～

P1 はじめに

1 日目：スキルアップ講座

P2 アタッチメント心理カウンセラー養成講座

P4 アタッチメント心理カウンセラー【受講生の声】

2 日目：シンポジウム【東京会場】

P5 シークレット・パネルディスカッション（寺下 謙三 先生 / 細井 香先生 / 鎌田 怜那先生）
～この 10 年の子育て環境を振り返り、これからの 10 年を見据える～

東京会場：優秀実践者表彰式・実践発表

P9 アタッチメント教室部門 藤原 淳子さん

P12 子育て支援 部門 株式会社 マール（梶浦 幸代さん、真部 雅子さん、森 明日香さん）

P16 東京会場：ランチミーティング

P16 東京会場：お悩みスーパーバイズ

P19 第 10 回 育児セラピスト全国大会 in2019 東京会場参加者の声

2 日目：シンポジウム【大阪会場】

P20 和歌山大学 教授 米澤好史先生 特別講演
「愛着障害の理解と支援」

大阪会場：優秀実践者表彰式・実践発表

P27 アタッチメント教室部門 細川 道代さん

P31 子育て支援 部門 野中 清子さん

P34 大阪会場：ランチミーティング

P34 大阪会場：お悩みスーパーバイズ

P37 第 10 回 育児セラピスト全国大会 in2019 大阪会場参加者の声

P38 スタッフ あとがき

P39 (社) 日本アタッチメント育児協会 講座一覧

P40 大学認定養成校のご紹介

P41 法人研修・団体研修のご案内 / 原稿・コンテンツ執筆・監修のご案内

資格アイコン

インストラクター資格

-  アタッチメント・ベビーマッサージ
-  アタッチメント・ヨガ(forマタニティ&ベビー)
-  アタッチメント・食育
-  アタッチメント・キッズマッサージ
-  アタッチメント・ジム
-  ベビーキッズ・あそび発達
-  プレスクール・あそび発達
-  子育てマインドフルネス
-  アタッチメント心理カウンセラー

育児セラピスト資格

-  前期課程(2級)
-  後期課程(1級)
-  シニアマスター

その他資格

-  アタッチメント発達支援 アドバイザー
-  トレーナー

＊はじめに

アタッチメントの原点に帰る

こんにちは、日本アタッチメント育児協会の廣島です。

今年の全国大会は、第10回の節目。そんなわけで、第1回のテーマ「10年後の子育て環境を考える」を受けて、第1回から10年後の『いま』を振り返り、さらにその先10年を見据えよう、という趣旨のもと「アタッチメントの原点に帰る」というテーマを掲げました。



10年というと、当時生まれた子どもが10歳です。10歳だった子どもは、成人式をむかえます。

第1回からの参加者の方で、

「今回の第10回が節目になった。この10年、そのときどきで、アタッチメントの学びに助けられながら子育てしてきて、子どもたちが成長して、いま自分の子育てにOKが出せることに感謝しています。」

と言ってくれた方がいました。

「10年後の子育て環境が、いまよりも良くなるように」という願いのもとに開催した第1回。それから10年して、この言葉をいただけたことは、私にとっては、本当にうれしいことでした。

一般社団法人 日本アタッチメント育児協会

理事長

廣島大三

【東京】淑徳大学 会場



【大阪】宝塚大学 会場





※スキルアップ講座

アタッチメント心理カウンセラー養成講座

育児セラピストのわたしたちだからこそ、
いまアタッチメントを学びなおそう！

「アタッチメントを学びつくす」というのが、今回のスキルアップ講座のねらいです。ジョン・ボウルビーがアタッチメント理論を発表してから、アタッチメント研究は、さまざまに広がり、深まり、活用され、そして新たな可能性を提示してくれています。これらは、すべて発達心理学、精神医学、臨床心理学、社会学、脳科学など、それぞれ別々の分野で、世代をまたいで起こっています。

まずは、それらを整理して「アタッチメントを学びなおす」ところから、講座ははじまりました。また、これまで講座の中ではあえて話をシンプルにするためにお伝えしていなかった用語や概念があります。これらについても、今回はきっちり取り扱いました。たとえば「内的作業モデル」。この専門用語は、これまで講座カリキュラムでは、あえて使ってきませんでした。しかし、「アタッチメントを学びつくす」上では、避けて通れません。

実際の講座では、思った以上にみなさんは、この専門用語を理解し、他の概念と結び付けておられる印象を持ちました。

新たなアタッチメントのあり方

アタッチメントを学びなおしたあとは、現在のアタッチメントの位置づけと、これからのアタッチメントの行き先について見ていきました。「母子関係」や「ひとりの養育者」といったこれまでの前提を再定義し、アタッチメントに、現代の子育てに適応した解釈を加えました。その根底には、「乳幼児期の子育てを、母親ひとりですべて背負う」ことが、理想の子育ての唯一の形ではないという考えがあります。

むしろ、「ヒトは、もともと集団型子育てを前提として、進化と発展を続けてきた生物だ」という人類学や進化学における事実に着目しました。「子育ては、様々な人たちに助けられて成立する」「お母さんひとりが、すべてを背負わなくていい」このことを、アタッチメントの視点から立証し、新しいアタッチメントの在り方を確認しました。

愛着障害における子ども支援・親支援、そして支援者支援

「愛着障害」これについても、今回は正面から扱いました。愛着障害の定義、発達障害との違い、専門用語としての扱い方など、愛着障害について語れるだけの基礎知識を、まずは学びました。そのうえで、愛着障害の子どもの支援とそれにつながる親支援に入りました。ここでは、大阪で講演していただいた米澤先生のご著書から多くの示唆を、カリキュラム中に頂戴しています。さらに、あまり取りざたされることのない「支援者の支援」も、心理カウンセリングという今回の講座の特性上、丁寧に扱いました。

「アタッチメント心理カウンセラー」に何が求められているのか？

心理カウンセラーと聞くと、心理の専門職や精神科医の分野で、自分には縁がないと考える人もいます。もちろん、治療家としての心理カウンセラーなら、そのとおりでしょう。しかし、身近な相談相手、カウンセリングの出来る支援者としての心理カウンセラーならどうでしょうか。そういう考えなら、みなさんの現場でも大いに活用できそうなイメージが湧きませんか？身近な人（みなさん）に悩みを相談したら、とても気持ちが楽になった。進むべき道が見えてきた。力が湧いてきた。

アタッチメントがカウンセリングに出会った瞬間

わたしも、実は10年前までは、「心理カウンセラーは、民間が手を出してよいものではない」という考えでした。しかし、近年アメリカをはじめとする心理臨床の業界では、先のような柔軟な考え方が主流になってい

るようです。

今回「アタッチメント心理カウンセラー」の中でご紹介するカウンセリング手法「メンタライジング」は、まさにそうしたコンセプトを持っています。



「メンタライジング」は、アタッチメント理論と精神分析を橋渡しした手法で、その基本概念は、アタッチメント理論に依拠しています。事実、メンタライジングの提唱者のピーター・フォナギーは、近代アタッチメント研究の第一人者でもあります。これに出会えたからこそ、わたしは今回アタッチメント心理カウンセラーに取り組もうと思いました。

メンタライジングの手法の中には、昨年リリースしたマインドフルネスも入っています。これは、意図したことではなく、偶然です。しかし、われわれにとって、これは偶然ではなく、必然だったのでしょうか。

支援者としての次のステップを踏みきかけにしてほしい

この講座を受けたある受講生から、こんな感想をもらいました。

「アタッチメント心理カウンセラー養成講座は、今までの（アタッチメントの）学びの再確認以上の、確信に繋がる内容を学ばせていただき、誰に何をどのように伝えてゆきたいのかということを経験、悩んでおりましたが、糸口を見つけることが出来ました」

受講された方それぞれにとって、似たようなことが起きていると思います。それは、アタッチメントをきっちり学び尽くしたからこそこのことであり、それを、大人に、親に、子どもに、支援者に、それぞれ活用するイメージを持つことが出来たことによるものだと思います。

それぞれの活動や支援のスタイル、立場に合わせて、この学びは、自由に活用できるようなものだと思います。

<文責> 廣島 大三



アタッチメント心理カウンセラー 受講生の声

ベビマの教室や職場で相談にのる機会が多いです。ベビマの後は必ずティータイムをして参加者みなさんがそれぞれ（公表できること）悩みや愚痴を話したり、質問コーナーで話したり。1対1でベビマの説明をする時もそのままお悩み相談になることも多々あります。本当に色々な悩みを話してくれて泣きながら話し、帰りは笑顔で帰られる人もいます。そんな中、カウンセラーについて学びたいと思っていたところタイムリーな講座でした。

メンタライジングと昨年学んだマインドフルネスをしっかりと活用したいと思います。今回の講座も、うん！うん！と心にくる内容でした。まずはメンタライジング能力を高めます！楽しみながら分かりやすい講座でした。本当にありがとうございました

児童厚生員 49歳 秋田県

学術的なことを知れて楽しかったです。また、発達障害と愛着障害の症状が同じでも、原因が違うが、アタッチメントはどの子にも有効ということが再確認できました。心理のカウンセリングというものに昔から興味があって、色々なカウンセリングの手法やマインドフルネスが少し分かり良かったです。

保育士 59歳 愛知県

子育ての環境が変化しており、子育てが難しい世の中になっている今日子育てが少しでも楽しいものと感じてもらえる手伝いができればと思いこの講座の受講を希望しました。世の中の変化を理解し、保護者に寄り添いながらも自分自身も研鑽を積み身近な相談者、支援者になりたいと思います。ありがとうございました。

保育士 50歳 愛媛県

どの様に相談者に対応し、声掛けすれば良いか具体的にわかって良かったです。実際に行ってみると難しいので、何度もイメージトレーニングをしたいと思います。逆にしてもらった感想としてはとても気持ちに寄り添ってもらえて気持ちが軽くなりました。

今まで受講したものの振り返りにもなり、保育の場で使っていけて、とてもためになりました。ありがとうございました。

保育士 40歳 千葉県

産後子育てをするママの育児不安が増すなかで、それでも愛情を持ちながら育てるママと不安な余裕のなさから子どもと離れてしまうママを間近で見ました。そんなママと子ども達に少しでもアタッチメントを育めるような手助けをしたいと思い今回受講させていただきました。

私は心理学の大学を卒業していますが、アタッチメントを取り入れながらの心理カウンセラーはすごく興味深く、そして自分の中で一番理解しやすい内容でした。

今回は、子どもだけではなく養育者に焦点をあてた講座でしたので、より一層養育者への理解も深まりました。今後、子育てをするママ達の育児相談を受ける時は、相手の理解からスムーズに入れる気がします。

助産師 46歳 群馬県

シンポジウム 東京会場



2019. 10. 27 開会式

シークレット・パネルディスカッション

～この10年の子育て環境を振り返り、これからの10年を見据える～



写真左から広島理事長、寺下 謙三先生、細井 香先生、鎌田 怜那先生

シークレットの部分、 いま明かします

今回「シークレット」と銘打って、パネリストを明かすことなく当日を迎えました。実際にパネリストとしてお呼びした一人は、育児セラピスト1級の中の「命より心」のビデオで観たあの寺下謙三先生です。寺下先生は、10年前の第1回全国大会でも、パネリストとしてご登壇いただき、医学の立場から、お話を伺いました。

二人目は、東京家政大学の保育士養成課程で教鞭をとっておられ、会場となった淑徳大学では、当協会のベビーマッサージと育児セラピスト資格取得のための専門科目「育児学」を教えておられる細井香先生です。細井先生も、第1回全国大会で、パネリストとしてご登壇いただき、保育士養成、保育士の現場の立場からお話を伺いました。

三人目は、臨床心理士であり、自らもアタッチメント・ベビーマッサージ教室をはじめとするママ支援を行い、発達障害児の支援もされている鎌田怜那先生です。鎌田先生には、子育てにおける心理臨床の現場の立場から、お話を伺いました。

そして、ファシリテーターは、わたし広島が務めさせていただきました。

会場が一体となった白熱した「場」にしたかった

「理想論だ!」と言われるかもしれませんが、パネリストが順番に、参加者に一方通行的に発信するのではなく、観客も参加して一体になるライブハウスのような場づくり。パネリストと会場の垣根はなく、自由に意見や質問や悩みが飛び交い、時にはパネリストの方

も、会場の意見から刺激を受ける。そんな白熱した「場」。

そのためにした場づくりの工夫などは、2019年11月2日発行のメール「全国大会東京を終えて」で詳しく述べていますので、そちらをお読みください。

私も、パネルディスカッションに呼ばれる機会は多いのですが、今回のシークレット・パネルディスカッションは、手前味噌になりますが、「わたし史上・最高の、理想のパネルディスカッションだった!」と豪語できるものでした。

それは、ひとえに、参加者のみなさんが、パネリストの方に踏み込んでくれたおかげです。これまでの10年の関係性がなしえる業(わざ)だと思っています。素敵な「場」にさせていただいて、本当にありがとうございました。

それでは、ディスカッションの内容をお読みください。

ご参加いただけなかった方々には、伝わりきらない部分が多いかもしれません。レジュメ的なまとめなので、空気感まではお伝えできておりません。また、その場にいた人でないとわかりにくい話は、わたしの方で意識してお伝えしております。この辺は、言語でお伝える限界ということでご容赦を(笑)!

親の選択肢が無限に存在するという 現代の子育てにおけるストレスと重圧

まず、「この10年を振り返る」というテーマで、それぞれの分野のお話を聴きました。寺下先生からは、



寺下 謙三 先生
寺下医学事務所 / 寺下謙三クリニック 院長 / 心療内科医



医療の分野でも、女性の医者がこの10年で増えていて、たくさんの女医が活躍し、子どもを産んだあとも働いています。医者業界でもそうなのだから、他の業界はもっとだと思います。女性が結婚、出産後も働くとか、共働きというのは、この10年で相当に進んだのではないかと実感します。



細井 香 先生
東京家政大学 子ども学部 子ども支援学科 准教授

細井先生からは、これに関して、共働き子育て家庭の増加に比例して、幼児教育の苛烈化や、子どもの教育を塾や幼児教室まかせにしてしまう親の問題が、この10年で深刻になっているという話がありました。

ここには、共通して「忙しすぎる親」の問題が横たわっているようです。子どもを産んでからも、キャリアを続け働き続ける選択肢が増えたのは、歓迎すべきことです。一方で、子育てに費やす時間が減り、その埋め合わせとしての幼児教育や習い事の苛烈化が起きている。また、子育てのアウトソーシングのような側面も見え隠れします。はたして、これは悪いことなのでしょうか?

発達障害大ブームの時代を、 どう捉えるか



鎌田 怜那 先生

Mamilia-attachment and life care- 代表／臨床心理士

これに関して、お母さんの実態を、臨床心理士の鎌田先生に聞きました。「こうした背景の中で、発達障害や愛着障害が懸念されます。発達障害は、いまや大ブームと言ってよい状態で、NHK でも特集が組まれるほどです。臨床心理士の立場から言うと、発達障害の多くのケースが、愛着障害だとみられます。そういう影響も考えていかなければいけないでしょうね。」

さらに、鎌田先生の関わったケースでは、「お母さんの中には、発達障害の診断に積極的で、小学校に入ったら支援級に入れることを希望して、発達障害の診断を促す人もいます」そうです。こうしたお母さんのニーズは、教育のアウトソーシング（自分では手をかけたくない心理）なのかもしれません。

これについて、会場の保育士さん（関東）から、「うちの園では、お母さんたちは、お子さんの発達障害の診断を、何が何でも認めないで、なるべく普通級に進学することを希望します。」との意見がありました。そういうお母さんは、療育に行く代わりに、幼児教室に通って発達の凸凹を



修正しようとしたりします。

こうしたお母さんの真逆の心理状態は、端境（はざかい）期の特徴なのかもしれません。

愛着障害なのか、発達障害なのか、 現場はどう対応したらよいの？

これまでの話に関連して、会場の二人の方から同じ方向性の質問がありました。

◆会場からの質問

『幼児教室をやっているのですが、最近は、生徒さんに発達障害児のお子さんもいます。これまでの話を聴くと、愛着障害のケースも多いとのことですが、発達障害なのか、愛着障害なのか、われわれとしては、それをどう判断していったらよいのでしょうか。また、その子たちにどのように対応していけばよいのでしょうか？』

この質問には、まず「医療判断」の立場から、寺下先生に話をお聞きしました。

まず、発達障害なのか、愛着障害なのか、医者としてははっきりしたことは言えないのが現状です。これは、ガンなどの病気も同じです。医者によって、診断も治療方針も分かれることはありますし、何が正しいとは言えないのが医療です。10年後には、こっちが正しかった、などということもあります。例えば、認知症というのは、どこからが認知症で、どこまでが、単なる加齢による認知の低下なのか、明確な線引きはありません。それと同じです。どこからが発達障害だとは言えない。例えば、医者仲間で、自分たちの多動傾向の特徴を、『おれたち発達障害だな』なんて、良い意味で表現することもあります。つまり、あまり、**診断名や言葉に惑わされる必要はない**のです。目の前の子を見てあげればそれで良いと思います。そこで一つ提案なのですが、『障害』の部分に『特性』と言い換えるようにしてみたらどうでしょう。『発達障害』ではなく『発達特性』、『愛着障害』の代わりに『愛着特性』と。そうすれば、**その子の特性として、目の前の**

子どもを見てあげやすいのではないのでしょうか。

◆会場からの質問

『私の息子は発達障害だと思うのですが、お医者さんは、発達障害ではなく、発達遅延だと言います。でも、発達が遅れているだけでそのうち追いつくようにも思えません。発達遅延だと信じていた気持ちもありますが、発達障害だと診断をもらえば、踏ん切りがつく気がします。この状況をどう理解すればいいのでしょうか』

発達障害の多くが愛着障害だとすると、わたしの育て方に問題があったの？

会場の雰囲気も活発になってきて、さらに意見があがりました。

「私は、3番目の子どもが発達障害で生まれました。自分でもいろいろ勉強して、息子にはできる限りのことをしているつもりです。むしろ上の子に手が回らないことが申し訳ない思いです。でも、発達障害の多くが、愛着障害だと言われると、わたしの子育てが間違っていたのか、もっとできることがあったのかと思ってしまいます。」

これについては、私から米澤先生の「愛情の器」の話をさせていただきました。米澤先生は、愛着障害の子どもの支援を現場で数多くされている研究者です。

子どもには、愛情を受け取る器があるのですが、それには4つのタイプがあります。わかりやすいのは、通常の愛情が入りやすく貯まりやすい器です。これに対し、愛情の器の底に穴が開いていて、もらった愛情がこぼれてしまうタイプや、器状になっていなくて、



そもそも愛情が貯まらないタイプ、器の口が極端に小さくて、愛情が入りにくいタイプがあります。どれも、その子の特性です。愛着障害は、育て方だけの問題ではないのです。その子の持っている愛情の器の問題でもあるのです。

そもそも質問者さんのお子さんが発達障害なのか、愛着障害なのかを、にわかに診断することはできません。少なくとも言えるのは、質問者さんの子育ての話をお聞きして、その人となりをみる限り、養育の問題ではないことが、わたしには見て取れました。そのことをお伝えしたうえで、「仮に愛着障害の傾向があったとしても、それはお母さんの育て方のせいじゃないですよ。」ということを強調しました。

お子さんの愛情の器の問題かもしれないし、お母さんとお子さんの相性の悪さによるものかもしれません。そういうこともあるのだということを、わたしたちは知ったうえで、支援をすすめる必要があります。この問題は、わかりやすい解答はできない問題ですので、ここで言えるのはこれくらいでしょうか。

＜文責 廣島 大三＞



※ 東京会場：優秀実践者表彰式・実践発表



左から寺下 謙三先生、藤原 淳子さん、梶浦 幸代さん、森 明日香さん、真部 雅子さん、廣島理事長

アタッチメント教室部門：親子教室 講師

東京都

藤原 淳子さん

取得資格



藤原さんが、アタッチメント・ベビーマッサージの資格を取得したのは、10年前、2009年のことでした。当時すでに訪問型チャイルドマインダーとして活動しており、同じチャイルドマインダー仲間のすすめがあったので、資料請求してみたのがきっかけでした。

そんな藤原さんが、教室を開いて、これまで続けてこられた物語をお話いただきました。

ベビーマッサージよりもアタッチメントに興味があくぎづけに

資料を読んでみると、ベビーマッサージのことよりも、アタッチメントのほうに興味湧きました。

「チャイルドマインダーでやってきた今までのことが、点と点でつながっていく感覚を感じた。また、アタッチメントを知り、子育ての軸になるのは『これだ!』と引き込まれた」

そして、すぐさま受講を決めます。ちょうど、はじめての子どもが、おなかにいるときです。その後、長男を出産し、わが子といっしょにベビーマッサージを実践しました。

はじめて開いた教室は、長男も参加の「親子ふれあい教室」

ベビーマッサージ資格を取得して約1年半後、親子教室「ひらめきっず」をスタートします。はじめてのレッスンは、お友達2組と、藤原さんのお子さん（当時1歳8か月）の3組で行った無料のプライベートな場でした。お子さんの年齢が2歳まえだったこともあり、「親子ふれあい教室」として、遊びを取り入れた内容にしました。

このとき「私の知っていることを伝えていける場を作

りたい」という思いをかためたそうです。

2人目のお子さんの誕生でベビークラスを追加

「親子ふれあい教室」を続けていると、じょじょにクチコミでお母さんが集まるようになりました。すると、生徒さんの中に2人目のお子さんが生まれた方が出始めました。



「下の子も何かやりたい」

自然なカタチで、ベビークラスが出来て、ベビーマッサージ教室がはじまりました。

このころから、クラスの人数に合わせて、自宅だけでなく、地元のコミュニティセンターを使うようになります。



また、来てくれたお母さんに、メッセージを添えたり、写真をプレゼントしたりもします。こうした「心づかい」は、教室運営において、大きな効果があります。（もちろん、効果をねらってやるのではなく、気持ちを伝えるためにやっていることが前提です）



「あそび発達」の受講であらたな展開へ

「ひらめきつず」をはじめて3年経った2014年、藤原さんは、「ベビーキッズあそび発達」を受講します。

通常、ベビーマッサージ教室の場合、その後のメニュー拡充のためにすすむのは、同じ流れで大きい子にも対応する「キッズマッサージ/アタッチメントジム」に行くのが自然です。実際、そういう方が多いですし、やりやすいのは確かです。

しかし、もともと「親子ふれあい教室」で、「あそび」をテーマにしていた藤原さんが「ベビーキッズあそび発達」に注目したのは、むしろ自然な流れでした。

「あそび発達教室」を開校

最初は、「親子ふれあい教室」のクラスで取り入れていた「ベビーキッズあそび発達」は、2年後の2016年には単独のクラス「あそび発達教室」に進化します。

このころから、活動場所も、これまでの自宅教室とコミュニティセンターのほかに、厚木産婦人科や親子ひろばにこここパークなどへと広がりを見せます。

リニューアル「アタッチメント親子教室」へ

さらに2年後2018年には、「あそび発達教室」は、「アタッチメント親子教室」としてリニューアルされました。これによって、ベビーマッサージのステップアップクラスとしての特色をさらに強め、0・1・2歳の親子をより見据えた展開を実現しています。

この藤原さんの展開は、全国の子育て支援の現場で、

もっともお母さんが必要としている「場」のモデルとなるものだと思います。

ポッカリ空いた1・2歳児向けの子育て支援

ベビーマッサージ教室は、すでに多くの子育て支援で導入されています。しかし「ベビーマッサージのあと」から3歳になるまでの親子を受け入れてくれる教室は、意外と少ないのです。その後、3歳以降は、保育園や一般の幼児教室など、受け皿は多くなります。つまり、1・2歳児向けの子育て支援が、ちょうどポッカリ空いてしまっているのです。

その点で言うと、藤原さんをはじめ、当協会のインストラクターの方々は「ベビーマッサージのあと」を実践いただいている方が多く、地域の子育て支援のなかで、切れ目なく機能しているケースが多いようです。

進化し、関係性を大事に育ててきた藤原さんの10年

藤原さんの活動がこれまで10年続いてきた上に、こうした広がりを見せているのは、「ひらめきっず」を開校した当初から藤原さんが続けてきた2つの要素が大きな役割を演じています。

ひとつは、ベビーマッサージを軸に、あそび教室を展開して多様なアクティビティを提案し、内容のバージョンアップを欠かさなかったこと。

もうひとつは、常にお母さんに目を向け、お母さんたちが何を求めているのかを感じ取り、ときには悩み相談にのり、ときには友達になり、ときには先生として導き、お母さんとの関係性を大事にし続けてきたこと。

それらが合わさって成し遂げられた10年なのだと思います。

もうひとつの藤原さんの物語

藤原さんには、「ひらめきっず」の物語のほかに、もう一つの物語があります。それは、当協会の認定講

師である島田恭子先生との10年にわたる長き縁のお話です。

じつは藤原さんは、アタッチメント・ベビーマッサージを受講したあと、実際にアタッチメント・ベビーマッサージを、近くで教えてくれる教室をさがしました。

そして見つけたのが、島田先生の乳児院で主催している子育てひろば「にこにこパーク」。さっそくベビーマッサージやベビーマッサージに、生徒として参加しました。けっこうな常連リピーターだったそうです。(笑)

その後、「ひらめきっず」を開校して、インストラクターとして活動をはじめたのは、これまでの話のとおりです。話は、これでは終わりません。

なんと、それから7年後に、その島田先生の「にこにこパーク」へ、今度はインストラクターとして教える側として行くことになったのです。これは、今でも続けているそうです。島田先生は、さぞ感慨深い思いだと思います。



子育て支援 部門：サロン経営 香川県

株式会社 マール

(梶浦 幸代さん、真部 雅子さん、森 明日香さん)

取得資格



株式会社マールさんは、リラクゼーションサロンを運営する会社です。マールさんの展開は、産後ママに多くの顧客をもつ同社ならではの展開です。注目すべきは、リラクゼーションサロンでベビーマッサージ教室を展開しているというだけでなく、リラクゼーションサロン事業が、当協会の学びときれいに噛み合い、独自の子育て支援プラットフォームとして機能していることです。

この事例は、接骨院、整骨院など他の施術系事業や歯科医院、小児科医院で参考になるのはもちろんです。それだけでなく、ひろば事業や子育て支援センターの運営においても、参考になることと思います。

発表では、代表の梶浦さん、セラピスト（施術師）の真部さん、院内保育士の森さんが、それぞれの立場でお話をしてくれました。

【経営者としての梶浦さんのお話】 自然にいたった産後のママの役に立ちたいという思い

マールさんでは、ママのための「産後エステ」サービスを展開し、梶浦さんもセラピストとしてお客さんに接していました。

そんな中、こんな声が気にかかりました。「明日から始まる子育てが不安」「授乳が上手くできなくて母親失格」初産婦さんの8割が不安を抱えて退院していく現実を知ります。すると、産後うつ、幼児虐待、育児放棄、いじめ、産後ママの自殺といった社会問題が、現実味をおびて感じられました。

「私に何かできることはないか」「子育てをもっと楽しくハッピーにしてあげられないか」

同じ母として、女性として自然に、そんな思いにいたりしました。

ママたちの不安に寄り添うための知識とスキルを

梶浦さんは、ママたちの不安な気持ちに寄り添おうと考えました。そのためには、自分がもっと学ばなければ、対応できないと思い、学びを求めました。

インターネットで探すと、一つの言葉がひっかかりました。

「根拠を持って、赤ちゃんのことを知る」

読み進めると、その根拠は、「アタッチメント理論」と「発達心理学」にあると書かれていました。すぐさま「これだ!」と直感し、さっそく申込をしました。それが、「アタッチメント・ベビーマッサージ講座」であり、日本アタッチメント育児協会との出会いでした。

少人数のクラスで、丁寧にアタッチメントを伝えよう

資格取得後、さっそく教室を開きます。大人数だと伝えきれない、パパとママ両方に伝えたかったという理



由から、はじめてのベビーマッサージレッスンは、4組のパパとママと赤ちゃんで開催しました。

「これならパパにもできる」「赤ちゃんが笑顔になって嬉しい」といった生徒さんの声に確かな手ごたえを感じました。

もっとママたちに寄り添うサロンになれる

「ママ支援」のスイッチが入った梶浦さんは、ママに寄り添う新たなコンセプトを立てました。

「保育士のいるリラクゼーションサロン・マール」

この新コンセプトは、マールさんの事業のポジショニングを変えるような大きな役割を果たします。顧客を「子育て中のママ」と明確化する。これは、近代マネジメントの祖ドラッカーも推奨する手法です。

顧客満足が各段にあがり、関係性が深くなる

マールさんは、もともと産婦人科からの「産後エステ」が入り口の集客として機能しています。そこに、さらに「ベビーマッサージ教室」が加わります。

そして、ひとたび顧客になれば、子連れでエステに行く。施術中も安心してエステを受けられる。ベビーマッサージも教えてもらえる。育児セラピスト（育児の専門家）が育児相談にもものってくれる。こうなると、一度マールさんに来たら、他のサロンに行く理由はみつかりません。

子育て中の社員の教育がすすむ

さらに梶浦さんは、社員に対して、自らが学んだことを伝えます。それによって、社員のアタッチメントに関する知識レベルが上がり、顧客対応は向上します。それだけでなく、子育て中の社員にとってアタッチメントは、みずからの関心事ですので、内的動機で学習がすすみます。実際、マールさんでは、梶浦さんのほかに、2名の社員が、アタッチメント・ベビーマッサージ講座や育児セラピスト1級などを受講されています。しかも、おふたりとも自分の意志で受講しており、当

初梶浦さんは、受講したことを知らなかったそうです。こんな方が接客してくれたら、お客さんは、大満足でしょう。

子育て支援をつうじて行政や他企業とのつながりも



サロン事業は、「子育てママ」に特化することで、事業そのものが子育て支援として機能しはじめます。

そうなると、企業の子育て支援型福利厚生のアутソーシング先として、他の企業（とくに大企業）から声がかかるようになります。

また、香川県の取り組みとして、ママさんの悩みを行政に届けることを目的とした「子育て美容 eki」への県からの参加オファーにもつながりました。

こうして、行政や他企業ともつながりながら、まさに子育て支援のプラットフォームとして、機能するようになりました。

【セラピスト・真部さんのお話】

セラピストの真部さんは、梶浦さんのアタッチメントの講習に共感し、その後自らも受講したひとりです。



3人のお子さんの子育てをする真部さんが、まず受講したのは、育児セラピスト1級でした。みずからの子育てへの興味もあったことと思います。

まずは、育児セラピストから学んでみよう

ママたちに施術を行う真部さんは、悩みや不安を聞いたり、アドバイスを求められたりすることが多い立場です。そうしたママたちに、きちんと根拠をもって答えてあげたい、という思いから、まずは、育児セラピストを受講されました。翌年、アタッチメント・ベビーマッサージ講座も受講されています。

施術中のコミュニケーションが、関係性づくりのカギ

元来、施術で体をほぐされると、人間は心がオープンになります。サロンが、悩み相談になるのは、そのためです。

アタッチメントについて、発達について、コミュニケーションについて、夫婦について、家族について。育児セラピスト1級でこれらを体系的に学ばれた真部さんに施術されたママは、とても安心感をもつでしょう。そして、満足度が高く、人間関係も深くなることは容易に想像できます。

真部さんは発表の中で「ママを笑顔にしたい!」「悩みに寄り添いたい!」「問題解決につなげたい!」という思いを語り

「子育て中のママが癒され笑顔になり、その子どもたちも癒しと笑顔が連鎖する」という考えをモットーにしていると話してくれました。

スタッフに教えることで、知識が定着し、理解が深まる

真部さんは、受講後に、スタッフに学んだことを教えました。これは、スタッフ教育になるだけでなく、真部さん自身のスキルアップにもつながります。人は、インプットしたことを、アウトプットすることで、理解



を深めます。中でも教えることは、アウトプットとしては最高です。

【保育士・森さんのお話】

梶浦さんの新コンセプト「保育士のいるリラクゼーションサロン・マール」の実現において、大きな一役を担ったのが、保育士の森さんでしょう。



梶浦さんの新コンセプトを形にしたい

森さんは、子連れでサロンに来たお母さんが施術している間の託児を受け持っていました。そこで、子育てに悩むお母さんたちの姿を目の当たりにします。それとともに、そうした悩みに応えるために、本格的に学ぼうという気持ちが芽生えていました。

そして梶浦さんが受講した5か月後に、「アタッチメント・ベビーマッサージ講座」を受講しました。森さんも2児のママですが、受講当時お子さんは0・1歳のころですので、まさにご自身の子育てでも、ベビーマッサージを取り入れて、仕事のスキルアップと育児の関心がうまくかみ合っていたのだと思います。

ベビーマッサージ教室が入り口集客として機能するまで

資格取得後は、サロンのお客さん向けにベビーマッサージ教室を開きました。そのため、プライベート感を重視して少人数の完全予約制ではじめました。

その後、子育て支援センターにチラシを置いて頂いたり、産院の産後エステサービスといっしょに案内したり、自社の産後整体のお客さんに案内したりして、マールのベビーマッサージ教室を知ってもらうようにしました。こうして入り口集客としてのベビーマッサージ教室がスタートします。

サロン内の教室だけでなく、出張教室で、さらに認知を広げます。支援センター、親子カフェ、イベント、スポーツジム。

こうして、森さんを中心に、サロンの入り口集客として、ベビーマッサージが機能し始めます。



廣島が見たマールの注目ポイントのまとめ

株式会社マールの3人の発表は、これからの社会貢献型ビジネスのモデルとなるものです。会社である以上、利益を出さなければ、存続できません。しかし、社会や地域の役に立っていなければ、やはり存在価値は認められません。つまり、「そろばん」と「思い」の両輪を回す必要があるのです。代表の梶浦さんは、そこをバランスよく運営されていると思います。

マールさんのケースがうまくいった要因とは？

以下にまとめてみました。

- ・顧客を「子育てママ」に特化した
- ・社員教育として「アタッチメント」や「発達」を取り入れた
- ・子育ての悩み相談やママに寄り添う接客で、顧客満足を格段に上げた
- ・リピーターのフォローとしてのプライベートなベビーマッサージ教室
- ・リラクゼーションサロンというだけでなく、子育て支援プラットフォームのポジションを取った
- ・ベビーマッサージ教室を入り口集客として機能させた
- ・企業や行政との子育て支援を通じた連携を実現した

こうしてまとめてみると、やはり『顧客を「子育てママ」に特化した』戦略が、功を奏していると解釈できます。これは、一見簡単そうですが、徹底してやるのは難しいことです。企業の多くは、徹底しきれなくて、中途半端になって結果が出ないのです。その点、マールさんは、非常に徹底しているようにお見受けしました。



※ 東京会場：ランチミーティング



※ 東京会場：お悩みスーパーバイズ



今年も東京・大阪の両会場でスーパーバイズを行いました。

「今抱えている問題・悩み」をグループごとに話し合ってもらい、それに対して当協会理事長の廣島のスーパーバイズのもと、参加者全員からも意見をもらう、というものです。

A グループ

教室に参加している5歳のお子さんで、発達障害で療育にかよっているのですが、(並列の)2語文が理解できなくて、やりあぐねています。たとえば、「ドアを開けて」は通じますが、「ドアのノブを引いて、開けて」と言うと、ドアを開けることができなくてパニックになってしまいます。お母さんに療育の時の様子を聞いて参考にしようと思っても、何をしているのか把握されていません。このような場合、こちらとしてはどのような対応がしてあげられるのでしょうか。

グループ内での話し合いで出た意見では、お子さんというよりは、お母さんの方にしてあげられることがありそうだということ。そもそも、お母さんが、自分の子どもの発達障害を認めきれていないのではないかと。そこから目を背けてしまって、無関心な態度になっているのではないかと。あるいは、療育に通っているから大丈夫、と丸投げになっているのではないかと。そうした前提をもとに、お母さんの方に何かしらの働きかけを

することで、お子さんの状況の改善にもつながるのではないかと、話し合いの中で導いてくれました。少し詳しく状況をお聞きすると、さいしょに保育園の先生が気づいて、診断してもらおうと自閉症と言われ、療育に通うようになって2年経つという状況のようです。お母さんは、当初から一貫して子どもの自閉症には興味を示さない態度だそうです。

自閉症児の発達支援を、療育にアウトソーシングすることは、不可能です。お母さんに主体的に関わってもらおうのが一番よいのは、言うまでもありません。しかし、その気のないお母さんをその気にさせるのは、一筋縄ではいきません。言葉かけやアドバイスでは限界があります。だからこそ、やりあぐねているわけです。

これについての一つの突破口が、前日のアタッチメント心理カウンセラー講座の中にありました。支援者が子どもに働きかけて「うまくいったこと」を、お母さんと共有する、という方法です。その際、「あったこと(問題)」と「行ったこと(対応)」と「うまくいった結果(結果)」の3つをセットで共有することが重要です。

「お母さん、今日〇〇くんは、こういう問題行動がありました。そこで、こういう対応をしたら、〇〇くんは、ちゃんとうまく出来ましたよ。今日の成長は、とても大きな一歩だったと思います。」

こんな報告を重ねることで、徐々にお母さんも興味を持ちます。「どうすれば、うまくいく」という成功の対応があるので、家でそれをやってみようと思います。スイッチの入った瞬間です。そうして、実践してうまくいくと、それがお母さんの成功体験になります。そして、「自分の子どもは、確実に成長

することが出来るんだ」ということが実感できます。

つまり、支援者が子どもに働きかけて、まずは子どもを変えて、子どもが変わったことをきっかけに、親が変わる。そういうアプローチもあるのです。

では、今回の「ドアのノブを引いて開けて」が理解できない場合の具体的対応として、ど



んなことが出来るのでしょうか。それは、単語を一つ一つ区切って指示するのです。「ドアはどこ」「ノブってどれだっけ?」「これ引いてみて、引くときはどうするんだっけ?」「ノブを回すんだよね」「じゃあ引いてみて」「あ!ドアが開いたね」すべてが、かならず出来ることの積み重ねであり、小さな成功体験です。そのうえで、ゆっくりと区切って「ドアの ノブを引いて 開けて」と言えば、先ほどの成功体験の積み重ねと、この指令の意味がつながってきます。このように、最小の簡単な行動に分解してあげれば、必ずできるようになります。

そして、このことを、お母さんと共有して、お母さんの興味のスイッチを入れてあげてください。



【集合写真】東京会場



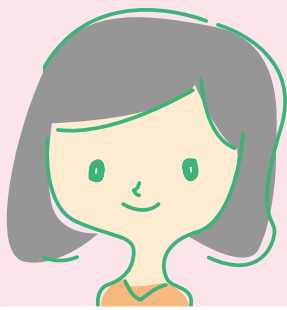
誌面で紹介しきれなかった他のお悩み in 東京

- ◆ 夫婦間の悩み相談になったとき、どのように対応するのが良いでしょうか
- ◆ 歯科医院で、ベビーマッサージ教室の担当になりましたが、院内の制約や反対意見に困っています。
- ◆ 自宅で教室を始めようと思いますが、猫を飼っておりアレルギーの扱いが心配です。
- ◆ 小2のお子さんで、お母さんと一緒じゃないと学校にいけません。いつまでこれが続くのか、親御さんは不安に思っています。
- ◆ 発達障害児の子育て経験を活かして、同じように悩むお母さんを支援したい気持ちがありますが、一步を踏み出せない。
- ◆ 「大丈夫ですよ!」と声かけをしたら、かえって機嫌をそこねてしまい、声かけの難しさを痛感しています。
- ◆ 保育士ですが独身なので、家庭のことを相談されてもイメージできなくて悩んでいます。



下記 URL より全文を見ることができます。

<https://www.naik.jp/blog/director/archives/1757/6>



第10回 育児セラピスト全国大会 in2019

東京会場 参加者の声

児童館に来られないほど悩みや問題を抱えているママを手助けするには？というのが悩みでしたが、優秀実践者発表をされたマールさんの発表がとても大きなヒントになりました。アタッチメント・ベビーマッサージの資格、やっぱり取りたくなりました。

子育て支援事業 46歳 埼玉県

毎回、学びが多く楽しみにしています。発達障害のお子さんが増えている今、その子たちが大人になり親になった時にどうになってしまうのだろうかと気になっています。なので、アタッチメントを一人でも多く伝えていきたいと感じました。お悩みスーパーバイズもとても良かったです。

親子教室主宰 30代 東京都

今回のお話の中で何度も出ていた発達障害について、自身がいま家族内で直面していることなので、それをテーマとして挙げて頂きグループワークの中でも深めて頂けてとても救いになり勉強になりました。

今日いただいたお話、お言葉を含め自分の経験を踏まえ、今後同じように悩んでいる方々に伝えていけたらと思います。いつか自分が発表できる時がくるよう、頑張っていけたらと思います。

事務 40歳 埼玉県

毎年参加させていただいており、楽しみにしています。今年はより皆様の意見や考えが飛び交い私は今までで一番楽しめた気がします。

英語講師・育児サロン運営 50代 群馬県

今年も自分の気付きになることが多く充実した時間を過ごせました。次回の全国大会がどんな内容になるのか楽しみです。

子育て支援 59歳 東京都

パネルディスカッションでは、前でお答えいただいた先生方のご意見も参考になりますし、言い方の勉強にもなりました。まだまだ時間が足りないくらいに感じました。悩みがその場で解決されていくので、スッキリした気持ちで帰れます。おいしいお昼ごはんもありがとうございました。

日本アタッチメント育児協会トレーナー

専門の先生方のお話は本やネットで調べるよりも、心に残り気付かされるものがありました。やはり、学びは対面と生の声がいいですね。

親子教室主宰 53歳 東京都

シンポジウム 大阪会場



2019. 11. 10 開会式

和歌山大学 教授 よねざわよしふみ 米澤好史先生 特別講演 「愛着障害の理解と支援」



米澤 好史 先生
和歌山大学教育学部教授

臨床発達心理士 SV、学校心理士 SV、
上級教育カウンセラー
臨床発達心理学・実践教育心理学（こ
どもの理解と発達支援・学級支援・人
間関係支援・子育て支援）

大学の研究者であり、現場を飛び回る支援者でもある、日本で数少ない愛着障害の専門家。米澤先生をひとことで表現すると、こうなります。その見た目は、やさしいアウトドアおじさんという感じ。そんな米澤先生のお話は、知識としては知っていることも、まるではじめて学んだみたいな新鮮さと高揚感がありました。同時に、これまでやってきたことの後押しを得た思いもありました。講演が終わっても「もっとお話を聞きたい」みんなのそんな思いが、会場全体に伝わる講演でした。そんな先生のお話をダイジェストにまとめました。

保育・教育・施設…現場の支援 をとおして研究してきたこと

米澤先生の現場支援をとおした研究テーマに、「攻撃性の支援」「意欲の支援」「人間関係の支援」の3つがあります。研究のなかで分かってきたことは、「攻撃性」「意欲」「人間関係」の問題は、すべて愛着（アタッチメント）の問題が関与しているということ。

愛着の視点から支援をすれば、これらの問題は必ず解決できるという確信にいたりしました。この確信のもとに、愛着障害の支援をしています。

オギャーと生まれて、大人になり、 年老いて死んでいくまでの生涯 発達の視点

愛着障害の支援は、こどもだけのものではありません。愛着は、赤ちゃんから、幼児、学童、思春期、成人、中年、老年まで、人間の生涯にわたって関係しています。近年注目されているのは、大人の愛着障害です。大人の愛着障害は、人間関係の問題で非常に苦悩されます。このように、愛着障害における支援は、生涯発達の視点でおこなわれる必要があります。

愛着障害と発達障害の違いが考 えられていない間違った支援

愛着障害の支援は、現場に足を運ぶことが重要です。現場を知らない専門家は、親御さんや先生（支援者）に間違ったアドバイスをしてしまうことがあります。アドバイスの通りにやっているのに、問題が一向に解決しない、状態がよくなる。これは、「見立て」そのものが間違っているのです。

特にお伝えしたいのは、愛着障害と発達障害では支援の仕方が違うということです。でてくる問題行動の特徴がよく似ているので、発達障害児のための支援を愛着障害児に行ってしまうことが、よく起こります。

この背景には、世界中でみても、発達障害の専門家はたくさんいますが、愛着障害の専門家は、とても少ないという現状があります。そのため、愛着障害が、発達障害としてとらえられてしまい、支援が機能しないというケースが、起きるのです。

愛着障害はだれがなおせるのか

愛着障害をなおせるのは、医師でしょうか？発達障害の治療には、投薬があります。これは、愛着障害には効果がありません。心理の専門家でしょうか？心理療法も、愛着障害のこどもには限界があります。愛着障害をなおせる一番の人は、「日々その子と関わっている人」です。かならずしも親でなくともよいのです。その子と、一定以上の期間、安定的に関われる、特定ひとりの人です。



親子関係のウソ・ホント

ここで、みなさんに親子関係に関するクイズをやってみたいと思います。

落ち着きのないこどもには、 動きまわってはいけないと その都度、叱るとよい？

これはウソです。落ち着きのないこどもに対して、「叱る」は機能しません。

愛着障害について言えば、これまで2つのタイプに分けられていましたが、米澤先生が発見した第3のタイプを合わせて、3つのタイプに分かれます。

1. 叱ると、余計に悪化するタイプ

落ち着きのない行動に限らず、問題行動を叱られるとその問題行動が増えてしまう

2. 叱ると、人間関係を切ってしまうタイプ

これは長期にわたるもので、現場の実例でいうと、お母さんに叱られて、それ以降2年間口をきかなかった子の例もあります。

3. 叱ると、大暴れするタイプ

泣き叫ぶ、ものを投げる、地団駄を踏む、数人で抑えなければおさまらないほど激しい
問題行動をやめさせよう、解決しようとして叱ってしまうと、やむどころか、かえって状況を悪化させ

てしまうことがあることを知っておいてください。

人間関係に問題をかかえることも、できるだけ早く集団に入れて慣れさせたほうがよい？

これもウソです。愛着における人間関係の基盤は、かならず「1対1」、二人で絆を作るところからはじまります。その絆ができていないうちに、集団に入れてしまうと、慣れるどころか、さまざまな人間関係の問題を起こします。

愛着障害のこどもの場合、大人と1対1だと安定しているのに、1対多の中に入ってしまうと、問題が起きます。そのため、愛着障害の支援においては、この「1対1」の支援を、いかに効果的に行うかが重要です。

母親の育児不安は、父親の子育て参加程度と関係がある

これもウソです。お父さんが積極的に子育てに参加しているのに、育児不安になるお母さんはいます。お父さんがあんまり子育てに参加していないのに、育児不安にならないお母さんもいます。

お父さんの育児参加度とお母さんの育児不安は、じつは無関係なのです。関係しているのは、お母さんの「受け止め方」です。「これでいい」とお父さんに対して思っているお母さんは、育児不安になりにくく、「まだ足りない」と思っているお母さんは育児不安になりやすいのです。

愛着障害の支援でも同じことが言えます。支援者は、

「何をしたか」でなく、こどもがその支援を「どう受け止めたか」を振り返らなければ、よい結果は得られません。

「この子は、こんな対応をしたら、こういう反応をするのか、それなら、次からはこうしよう」こうした振り返りによって、関わり方の方針を探る支援が重要です。

愛着障害は、感受性の問題でもある

愛着の問題が起きやすい親子関係の特徴についてもお話しておきます。親御さんの感受性が弱い場合。こどもが、さまざまに心のサインをだしているのに、お母さんがそれに気づけない。逆に、親御さんは、いっしょうけんめいこどもに関わって、愛情をしめしてくれているのに、こどもの方が、それを受け取れない場合。こうした感受性の問題で、愛着の問題が生じてしまいます。

問題行動がなぜ起こるのか、その理由をさぐることがもっとも重要

これまで多くの専門家は、こどもの問題行動にたいして、その原因を追究してもなかなかわからない。それよりも、その問題行動をどう変えるかに目を向けようまくいく、と言ってきました。

しかし、愛着障害の支援では、それはうまくいきません。問題行動が「なぜ起こるのか」を、関わる方とともに解明することがもっとも重要なのです。こどもの行動には、すべて理由があります。そこに対して、愛



着の形成・修復の支援をします。そして、支援の方策をたてていきます。それが成功すれば、問題行動はなくなっていきます。

一方で、せっかく良い支援を行っていても、ひとりでも足をひっぱる人がいると、うまくいきません。まわりの関係者のなかで、みんなが同じまなざしで、同じ理解をしていることが重要です。そうすれば、愛着障害の支援は、かならずうまくいきます。

愛着障害は、虐待児や施設児にだけ起こるの？

むかしは、愛着障害は、施設で育ったこどもや虐待をうけたこどもにだけ起こるものだと言われていました。これが、一つ目のまちがった理解です。

愛着障害は、誰にでも起こり得ますし、通常家庭でも起こり得ます。

これについて、現代社会の問題として危惧していることがあります。「刺激過多」の問題です。

テレビがなかった時代、生活の中に大きな刺激はありませんでした。そんな時代には、こどもにとって「親との関わり」が、もっとも大きな刺激でした。

現代は、テレビだけでなく、ゲームやスマホなど、強い刺激を得られるメディアが、こどものまわりにたくさんあります。これらは、「親との関わり」よりも相対的に刺激がずっと強いので、親子の愛着形成の機会を逸してしまいやすいのです。これが刺激過多の問題です。



愛着障害は、育て方が悪いせいなの？

もうひとつの視点として、愛着障害は、親の育て方のせいだと言われてきました。これが、二つ目のまちがった理解です。

愛着障害は「関係性」の障害です。関係性というのは、二人の間で生じるものです。親の関わりだけでは、決まらないのです。

二人のこどもの子育てをしているとき、同じ親が同じ対応をしているのに、一方の子には愛着障害の症状が出て、もう一方には出ない。そんなケースがあります。これは、「相性」の問題なのです。相性が悪いことで、お母さんの愛情がこどもに伝わらない、あるいは、こどもの気持ちを、お母さんがくみとってあげられない、ということが起こるのです。

愛着障害は取り戻せないの？愛着形成も修復も、親にしかできないの？

愛着形成には、臨界期や、敏感期があり、愛着障害になってしまったら、取り返しがつかない、今からでは手遅れだ、といわれていた時代があります。これもまちがった理解です。愛着障害は、いつでも取り戻せます。

また、愛着は、形成も修復も親にしかできないから、

親が変わらなければ、愛着障害はなおらない、とも言われてきました。これも、まちがった理解です。誰にでも、形成・修復が可能です。愛着形成は、親だけではなくありません。先生や友達、まわりのいろんな人と結ぶものです。

支援者が、愛着障害のこどもとの愛着修復を行い、うまくいったら、親御さんに知らせることで、親御さんが変わるきっかけとなることもあります。

特定の人と結ぶ絆・アタッチメントの正体とは

もともとボウルビーやエインズワースが定義したのは「安全基地」。恐怖や不安といったネガティブな感情から、「大丈夫だよ」と言って守ってくれる「認知・行動基地」です。

米澤先生は、これにもう2つの基地を加えて、3基地機能を提唱されています。

その2つ目が「安心基地」。ここでいう「安心」は、落ち着く、ほっとする、安らぐ、楽しくなるといったポジティブな感情を生み出す「感情基地」です。

3つ目は、「探索基地」。前の安全基地、安心基地が出来てはじめて「探索基地」ができてきます。そして、愛着形成が完了します。いわば、愛着障害の支援の要となる基地機能です。この3つの基地機能こそが、アタッチメントの正体なのです。

愛着形成のゴール・探索基地機能とは

探索基地においてはまず、安全・安心基地から離れる「分離」が起こります。このときの離れ方が自立的であれば成功です。

たとえば、お母さんと手をつないで遊園地に来ました。この時、お母さんの手をふりほどいて、走って行ってしまうこどもは、分離に成功していません。お母さんの方を振り返って、お母さんが「行っておいで!」というのを確認してから離れていけば、成功です。お母さんは、OKしてくれるのは「わかっているのに」振り返っ

て確認する。これを「参照視」といいます。これが見られれば「分離」成功です。

不登校は、この「分離」に対して、不安を抱いている状態で起こります。

次の関門は「帰還」です。探索に出かけていったあとに、安全・安心基地に帰ってくることです。そして、帰還した後は、探索で経験したことを、一番聞いてほしい人に「報告」します。

遊園地の例で言えば、ひとりで乗り物に乗ってきたときの話を「すごく楽しかったよ!こうだったよ」とお母さんに報告します。これによって、ひとりで経験したことを、一緒に経験したかのように感じることができます。

この「報告」によって、ひとりで経験した感情を変化させるのです。楽しいなどのポジティブな感情は、お母さんと共有することで、もっと楽しい感情になります。怖かったなどのネガティブな感情は、お母さんと共有しなぐさめてもらうことで、その気持ちを減少させることができます。こうしてこどもと親の「認知と感情」を共有する。これが、探索基地の大事な働きの一つなのです。このように、愛着とは、感情発達に深く影響します。

愛着形成は、なにに影響するのか?

「こどもの意欲ややる気をはぐくむ最大の要素が愛着形成(アタッチメント)だ!」、と米澤先生は結論付けます。

これについて、保育園、小学校、中学校、高校の各年齢帯における「やる気・意欲」と「愛着形成」と「学力」



における実証研究を示されました。その結果、どの年齢帯のこどもも、「やる気・意欲」が高まると「学力」も高くなる傾向がありました。それにもっとも影響したのが「認められ感」、つまり「愛着形成」でした。

これまで話してきた通り、愛着形成のゴールは「探索基地」です。そして、この探索基地機能こそが、こどもの「認められ感」をはぐくむのです。それが、「やる気・意欲」を高め、結果として学力が高くなるのです。

逆に、愛着形成がうまくなされず、探索基地が機能しないと、こどもの問題行動に作用します。攻撃性、いじめ、不登校、依存症（ゲームやネット）などは、「認められ感」の欠如が原因です。

こうした事実を知らずに、こどもに対応しても成果は出ません。

「多動」をみきわめる

一般に発達障害と言われる場合、大きく次の3つが考えられます。

- ・ ADHD（注意欠如多動性障害）
- ・ ASD（自閉症スペクトラム障害）
- ・ AD（愛着障害）

「多動」という特徴を前にすると、名称に多動が入っている ADHD と判断しがちです。実際には、どの障害にも「多動」の傾向はみられます。大事なのは、「何による多動なのか」をみきわめることです。

ADHD なら、「行動」の問題なので、「いつも」多動です。だから、多動性障害という名称がついています。

ASD なら、「認知」の問題なので、「居場所感」によって多動が起こります。持っていた本を取り上げられる、突然、予定が変えられるなど、自分の居場所が奪われたときに多動が出ます。

AD は、「感情」の問題なので、「ムラのある」多動の現れ方になります。ネガティブでも、ポジティブでも、気分が高まると多動が出ます。ほどよいときには、落ち着いていられます。



このように、多動が「現場でどう表れているか」が重要なのです。

愛着障害の3大特徴とは？

① 愛情欲求行動

ひとつめに、注目されたいという「アピール行動」が特徴として挙げられます。愛着障害のこどもは、悪いことをしてでも相手にされたい気持ちがあります。ときには自作自演の事件を装ったりもします。

ふたつめに、「愛情試し行動」が挙げられます。どの人が悪いことをしても叱らないかを見極めているのです。自分を叱る人の前では、いい子にします。そして、叱らない人の前で悪いことをするのです。

みつめに、「愛情欲求エスカレート現象」が挙げられます。ひとつ応えると、もっともっとと要求がエスカレートします。優しい人に対して、要求を強めてきます。

② 自己防衛

自己防衛は、愛着障害の支援で一番注目すべき特徴で、傷つきやすい心に鎧をきるのです。自分がよくないことをしても、決して認めない。大泣きする、ウソをつく、向き合わない態度をする。すべて相手のせいにしたり、相手を責める暴言をはいたりします。これは、大人の愛着障害にもみられる特徴です。

愛着障害は、幼少期に「誰も自分のことを守ってくれ

なかった」という原体験があります。悪いことをしたことを認めてしまうと、自分が壊れてしまうので、自分を守るためにこうした行動になります。こうした行動には、追い詰めない対応が重要です。

③ 自己評価の低さ

自己評価の低さのあらわれ方として「自己否定」と「自己高揚」があります。

自己否定は、何をやるにも「そんなこと出来ない」という態度を示します。これは、「成功体験の欠如」からくる自信の無さ、意欲の無さで、自己評価が低いことを認めています。

自己高揚は、どこかで「人より上だ」と感じられるポイントをつくる行為です。これは、「優位性への渴望」によるもので、虚勢を張ったり、誇大妄想的発言をしたりします。自己評価が低いことを認めたくないのです。こういう子は、学校や家で暴君になることもあります。

大人であれば、注意や指摘をしたがるとか、命令や支配、主導権を握ることに注力する傾向があります。

「愛情の器」づくりとは？

では、愛着障害のこどもの支援は、どのようにすればよいのでしょうか。そこで提唱しているのが「愛情の器づくり」です。

大事なものは、まず1対1の関係性をつくることです。ここではキーパーソンと呼びますが、これを決めてから支援を行うことです。この人は、肉親である必要はありません。誰にでもなることが出来ます。

支援する上で、もっとも大事なものは「先手」に関わることです。こどものしてほしいこと、やりたいことを、察して先にやってあげる。

そのうえで、関係性の中で生じる「感情の確認」が重要です。こどもの感情学習を促すのです。それは、感情を問うのではなく「言い当てる」のです。愛着障害のこどもに「いまどんな気持ち？」と聞く行為は、関係性を悪化させます。「いま、イヤな気持ちがして

るんだよね」と察して言い当てるのです。自分の気持ちをちゃんとわかって、口にしてくれる人が、一番安心できる人なのです。そういう存在の人との関係をつくるのが、愛着障害のこどもの支援で一番大事なことなのです。

「1対1」「先手の関わり」「感情学習」この3つが、これまでの支援の現場の中で見出した愛着障害の支援における「愛情の器づくり」のポイントです。ぜひご参考にしていただければうれしいです。

米澤先生のお話を聴いて

今回、米澤先生の講演をお聞きして、多くの発見がありました。これまで、発達障害と愛着障害について、「こどもの反応」という視点で、その違いを考えたことがなかったことを、反省する思いです。現場で、愛着障害のこどもの支援を実践されている米澤先生ならではの視点だったと思います。

これによって、発達障害児に対して有効な対応も、愛着障害児には有効ではなかったり、むしろ関係性を壊してしまうことにつながることもわかりました。一方で、これらを「対応リスト」や「マニュアル」にまとめるのではうまくいかないことも実感しました。

重要なのは、愛着障害は、「感情」の問題なのだということです。感情をともなうからこそ、人間関係をとおしてしか支援はできないのです。そして、乳幼児期の母親との愛着形成につまづいているからこそ、1対1の支援が基本なのであり、「母親がこどもにしてあげるような対応」が基本になるのだと思います。

＜文責＞ 廣島 大三



※ 大阪会場：優秀実践者表彰式・実践発表



【大阪会場】左から細川 道代さん、廣島理事長、野中 清子さん

アタッチメント教室部門：子育てサロン主宰 大阪府

細川 道代 さん

取得資格



大阪府吹田市で、子育てサロンを主宰し、ベビーマッサージやキッズマッサージを教える細川さん。自分のように悩むお母さんたちをサポートしたい思いではじめました。しかし、個人で教室をはじめるのは、簡単ではありませんでした。そんな細川さんが、困難のスタートアップから、教室をどのように軌道に乗せて、今のような形にまでしてきたかを話していただきました。

知らない土地ではじめて感じた子育ての孤独

細川さんは、もともと名古屋で生まれ育ちました。結婚して、ご主人の転勤が決まり、現在の大阪府吹田市に移り住みました。誰も知り合いのいない初めての地、しかもクセの強い印象のある大阪です。(笑)

そんな中、不妊治療の末にようやく第一子を授かりました。しかし、待ちに待った出産ののち、細川さんを待っていたのは、猛烈な孤独感でした。赤ちゃんの世話をしながら、夫以外の誰とも話すことなく、一日

が終わる毎日でした。そんな中、長女の便秘によって聞いて、近所のママサークルが主催していたベビーマッサージ教室に参加しました。これを機に、細川さんは孤独から抜け、子育てを楽しむことができました。

この時のくわしい話は、細川さんから前回いただいた活動報告がありますので、興味のある方は、会報誌2019年春号をご覧ください。か、協会公式ホームページの活動報告をご覧ください。

<https://www.naik.jp/blog/office/archives/8435>



自分がそうだったように、孤独と不安に悩むお母さんをサポートしたい

細川さんは、積極的に子育てサークルに参加するようになり、子育ては充実しました。しかし、主催者の方

が高齢になり、継承する人もいなかったため、このサークルが解散されてしまいます。

それを機に、細川さんは一念発起します。自分が子育てサークルのベビーマッサージ教室で救われたように、孤独や不安で悩むお母さんを、『こんどは自分がサポートしよう!』と決心しました。長女が生まれてから6年後のことです。

そして、さっそくベビーマッサージのインストラクター資格を取ろうと決意します。ホームページを見ると、さまざまな団体がありました。そのなかで、いちばん共感できて、自分の思いと近いと感じたのが日本アタッチメント育児協会でした。

アタッチメント・ベビーマッサージに続いて、アタッチメント・キッズマッサージのインストラクター資格を取りました。

オープンしても、誰も来ない日々・・・

2017年6月、資格を取得してすぐに、ベビーマッサージ教室「Ke Aloha(ケ・アロハ)」をオープンしました! 集客のためにブログを立ち上げ、フェイスブックやインスタグラムを始めて、チラシをつくってまいてみたり、考えつくことはやり尽くしてのオープンでした。しかし、誰も来ない。新しい人が来ないから、リピートもない。集客の難しさを知り途方に暮れる毎日でした。

わらをもすがる思いで参加した、大阪の全国大会が転機に



オープンから4カ月たった10月、大阪で全国大会が行われました。細川さんは、わらをもすがる思いで何

かヒントをつかもうと参加したそうです。結果的には、これが転機となりました。

この回の大阪は、わたしがアドリブで、東京のワークとは違う「お悩み相談会」をやってみたのです。現在の「お悩みスーパーバイズ」です。その時に質問したのが細川さんでした。

「集客がうまくいきません。教室を軌道に乗せるにはどうしたらよいですか?」

この質問はビッグ・クエスチョンです。簡単に答えられないので、原理原則のみをその場でお答えしました。

「ひとりでも、ふたりでも、来てくれた方にせいっぱい満足してもらえる運営をつづけてください。最初の1年は大変ですが、誠心誠意やっていれば、必ず口コミで広がり、教室は軌道にのります。」

細川さんは、私のこの言葉を、素直に信じてくれて、「何が何でも1年はやってみよう!」と決心してくれました。

ところで、集客には技術もあるのですよ

そうは言っても、集客には技術的なこともたくさんあります。それをあの場で教えるには時間が足りない。そこで、会が終了したあとに、希望者だけ残って「プチ集客講座」を行いました。じつは、このことは報告書に書いていないので、参加者だけが知っていることです。(細川さんのやる気が、わたしに火をつけたのです。)

「驚くほど人を呼ぶチラシ作りの極意」(これは東京会場で行ったワークの元ネタです)、「ブログ・SNSの効果的な利用法」などを、ほんのさわりだけですがお教えしました。

細川さんもチラシ作りのポイントを発表の中でまとめてくれていました。

当初のチラシは「それっぽい感じ」ではありますが、情報とイメージ写真(しかも外国人の素材写真)だけです。これでは安心感に欠け、人は行動を起こしません。



反応が取れているという最近のチラシは、「ひと感」があります。インストラクターである細川さんの顔写真や人となり。教室の風景、参加者の表情、赤ちゃんの表情。

きれいな宣材写真や素材写真ではなく、リアルな教室風景を載せることが「ひと感」につながり、それが安心感を生みます。さらに、細川さんの思いが「囲み」でつづられています。これなら、反応がとれるのは当然でしょう。

2 か月後、本当にクチコミが広がりはじめた

全国大会から2 か月後に、たまたま2 人のママが参加してくれました。この2 人が、のちにインフルエンサー（多くの人にクチコミして影響力がある人）となってくれたのでした。それ以降、クチコミは、どんどん広がり集客の悩みはなくなっていました。

さらに、この2 人は、いろいろな意見やアイデアをくれて、それらは、現在の運営の根幹になっています。



例を挙げれば、「ランチ付きレッスン」は、教室に来るポジティブな理由が欲しいという声から、「子育てミニ講座」は、何かしら学びを持ち帰ってもらったかどうかというアイデアから、また「回数券」はリピートする際に便利だろうという意見から出来上がりました。どれも、今では「独自の売り」になっています。

翌年もつづけて全国大会に参加、パパ向け教室をはじめめるきっかけに

翌年（2018 年）も大阪の全国大会に参加しました。このときの優秀実践発表で、九州の青山幼稚園さんから、男性インストラクター新福さんの発表を聞きました。細川さんは、大きな刺激を受けました。保育士ではない事務方の男性職員が、自分と同じアタッチメント・ベビーマッサージ資格を取って、保育園で教室をやっているのです。

この時の青山幼稚園さんの発表はこちらから

<https://www.naik.jp/life/special/2018/5.php> ※インストラクター専用サイト



新福さんは、男性インストラクターであることを活かして、父親のためのベビーマッサージ教室をやらされました。この発表を聞いて、パパだってベビーマッサージを習いたいニーズがあることに気づきました。

さっそくパパも参加できるベビーマッサージを企画。場所は、パパも来やすいだろうという理由で図書館を選びました。（図書館は、こうしたイベントを定期的に

やっているの、企画を持ち込めば、通る可能性は高いです) これによって細川さんの教室の幅が、さらに広がりました。



最近になって気づいた大事なこと

最近キッズマッサージをやっていて気づいたことがあります。0歳児にはベビーマッサージ教室がたくさんある。でも1・2歳児向けの教室は、意外と少ないため、この時期のママの居場所がないのです。3歳児以降は、保育園もあるし、いろんな習い事があります。

「1・2歳は、子育て支援の空白地帯。キッズマッサージは、それを埋めるものだったんだ」自分がやるべきなのは、0歳児のベビーマッサージと1・2歳児のキッズマッサージだ、と気づきました。(キッズマッサージは、3～6歳も対応していますので、生徒さんはそのまま続けられます)

もう一つ気づいた大事なこと。少人数クラスで運営する。それは、これまでずっと大事にしてきた「誠心誠意」を形にするということでした。いまは、多くても1クラス5組までとしています。

そして一番大事なこと。「『継続する』という熱い思いを持続けること」



これからの展望

長女が小学校に入ったのを機に、小学生向けに何かをしようと思いました。そして、2018年12月から、「ハッピー食堂あいのわ」を、仲間とともに立ち上げました。いま話題の子ども食堂事業です。子どもたちが、いろんな世代と関わることで学ぶ。親世代の心が軽くなる。シニア世代が活躍する場をつくる。3世代が、お互いに交流し、役に立つ場を目指して運営しています。

また、「努力を幸せに換える魔法のルール」と題した本の執筆にもチャレンジしています。

「最後に、この全国大会に毎年参加させてもらって、これまで1ステップ1ステップ着実に上ってくることができました。本当に、この全国大会はオススメです。多くの学びが得られ、たくさんの仲間と出会えて、いっしょに子育て支援の階段を上っていくことができます。これからも、みなさんと毎年お会いできるのを楽しみにしています!」

広島の見点

細川さんの抜きん出ているところは、「あたりまえを信じ切る力」です。それによって、「いちばん大事にしなければいけない本質」を、決して見逃さないのです。「誠心誠意」を信じ切って実行できるのは、もはや才能です。

キッズマッサージにおける1・2歳児のお母さんの居場所への気づきなどは、子育て支援全体で起こっている「子育て支援の空白地帯」の問題を、見事に言い当てています。

また、少人数クラスを貫くこともそうです。人気が出てくると、ともすれば1クラスの人数をふやして対応してしまいがちですが、そうすると満足度が下がり、やがてクチコミは途絶えてしまいます。

本質からズレなければ、人が途切れることはありません。教室運営の極意と言えるでしょう。

野中 清子 さん

取得資格



野中さんは、フリーランスの助産師として、行政の嘱託による乳幼児健診、赤ちゃん訪問、母乳育児相談を請け負ったり、看護学校の非常勤講師として「母性看護」を教えたりされています。そんな野中さんが、当協会で取得した資格と学びを、仕事の中で、どのように活かしているのかをお話いただきました。

助産師なのに、わが子の子育ては、 なにも知らなかった

なぜベビーマッサージ講座を受講しようと思ったのかについて、野中さんの理由は明快です。

「知ること（知識）は重要なことだし、必要だと思った」

その考えは、自身の子育て体験からくるものでした。野中さんは、切迫早産で緊急手術による帝王切開で出産。驚いている間もなく、子育てがスタートしたのです。

退院すると、泣いているわが子に、おっぱいをあげ、おむつをかえ、抱っこして、それでも泣きやまなくて、どうして良いかわからず、ただ不安にさいなまれる毎日。疲れ果てた末に思いました。「わが子はかわいい、でも子育ては楽しいものではない。」

「子育てについて、何ひとつ知らなかった」そんなご



自身の実感から、「知ること」に対する信念が育まれたそうです。

ベビーマッサージを、きちんと学ぼうと 決意したきっかけ

仕事に復帰し、数年が経ったころ、別の団体のベビーマッサージを受講したこともあり、仕事を通じて会おうお母さんたちから、ベビーマッサージのお話を聞く機会が何度かありました。そこで聞いたのは、教室に参加しても、自宅では行っていないという声でした。理由は、順番を間違えてしまう、やり方がわからない、自信がない、オイルがどうした、といったことでした。

「これは、何か違ってる。」直感でそう感じたものの、言語化することはできませんでした。そして、ベビーマッサージを、もう一度きちんと学びなおす決意をしたのでした。助産師という仕事からベビーマッサージとアタッチメントの関係は直感していたので、日本アタッチメント育児協会のアタッチメント・ベビーマッサージが、もっともしっくりきて受講しました。

知識を得てわかったことは、 「知らない自分」

講座を受講して、アタッチメントについて、ようやく学びの扉の前に立つことができました。自分は、わかったようで、何も分かっていなかった。アタッチメントとベビーマッサージのつながりについて、理解を深めることができました。

この体験に刺激を受けて、「育児セラピスト1級」「アタッチメント・ヨガ」「あそび発達」「アタッチメント・

食育」と、仕事に関係のありそうな講座を、続けざまに受講しました。そのおかげで、知識だけでなく、具体的な方法や解決策、カウンセリングスキルと、お母さんへの対応領域は格段に広がりました。

こうして知識を得れば得るほど、わかったのが「知らない自分」でした。自分には、仕事の領域だけでも、これほど知らないことがあったのだ、ということを知ったのです。

助産師として、お母さんにどう向き合い、サポートするか! 知識は、そのアプローチや支援の幅を広げてくれた

では野中さんは、実際に助産師の仕事のなかで、これらの知識やスキルをどのように活かしているのでしょうか。

助産師という仕事は、一人ひとりのお母さんと向き合うことが、とても大事です。お母さんと、落ち着いて向き合えるように、まずはお母さんの話に耳を傾ける。そして、何に悩み、どんな困りごとをかかえ、どのように子育てをしていきたいのかを、お母さん自身に気づいてもらいます。それを支援する人間が、いま目の前にいるのだと気づいてもらいます。ここでは、カウンセリングスキルやコミュニケーション論が、役立っています。

この段階を経て、お母さんに聴く耳を持ってもらってから、必要な知識を伝えたり、アドバイスをしたりします。これらは、「いまの自分」に「+α」をあたえます。この「+α」によって、お母さんの中にやる気が出て、自信が生まれて、自己肯定感が増します。

「こちらが伝えたいこと」ではなく、「相手が知りたいこと」を伝える。その繰り返しの先に、伝えたいことも伝わっていくのだと思っています。

ヨガでママはリラックス、ベビーマッサージで赤ちゃんもリラックス、そして子育ては前向きに

具体的にやっていることもご紹介いただきました。ま



ず、お母さんにリラックスして、心をオープンにしてもらう方法として、アタッチメント・ヨガの手法を取り入れています。呼吸法や姿勢の意識などです。体の使い方を意識できているお母さんは、意外と少ないのです。それをするだけで、抱っこも楽になるし、肩こりや頭痛も軽くなります。

お母さんの体の話のあとは、抱っこされて待っていていた赤ちゃんに、簡単なベビーマッサージをしてもらいます。決して難しいものではなく、お膝で横になっている赤ちゃんのほっぺをなでたり、おててを触ったり、といった簡単なものです。

お母さんは、そんなことでいいの?これがベビーマッサージなの?という反応です。でも、赤ちゃんの気持ちよさそうな表情を見て、こんな簡単なことでも、赤ちゃんは幸せで気持ちいいんだと気づきます。

こうした「これでいいんだ」という気づきが、子育てを前向きにとらえるきっかけになります。

子育ての正解を追うのではなく、自分なりの子育てを見つける。そのためには、知識が必要

そんな中、子育て支援の現場で感じている問題についてお話しいただきました。お母さん方と接していて感じるのは、子育てに答えがあるかのように考えてしまっ、納得できるまで試行錯誤して、子育てしていないのではないか、ということ。それは、どこかで、子育てをだれかに委ねてしまっているようにも見えます。

自分で考えるためには、それなりの知識（リテラシー）は必要です。その意味で、かつての自分がそうだったように、お母さんたちも知らないことや分からないことがたくさんあると感じています。

それと関係して、お子さんの「外の成長」にとらわれ、人との比較により、わが子の「内の成長」つまり、その子自身の成長を感じる機会を失っているのではないかと感じています。比較してしまうと、できた、できない、早い、遅い、で不安になり、焦ります。本来、子どもの成長は、それぞれなので、その子自身の成長の軌跡を喜べば良いだけです。そうすれば、不安や焦りの代わりに、成長の喜びを感じられます。これも、子どもの発達や子育てについて、知識や理解が不十分であることが原因で起こっていることではないでしょうか。

今後の展望

これからも、仕事をとおしてアタッチメントについて考えながら地道に伝えていきます。

誰にとっても親になることは「はじめて経験すること」。だから、子育ては、大きなチャレンジです。

アタッチメント的に言えば、「育てられる存在」から「育てる存在」になることです。これから子育てを経験する方や、子育て真っ最中の方たちへ、知識や技術を提供してお手伝いをさせていただくサポーターでありたいと思っています。



わたしがこれまで学んできて、辿り着いたのは、『対話』重視の子育て支援です。一人ひとりに寄り添い、「育てる存在」になるためのお手伝いです。

そのために、私はこれからも、もっとアタッチメントについて「知る」ことを続けていこうと思います。

廣島の考察

野中さんは、協会設立当初に、私が「育児セラピスト」に込めた思いを、そのまま体現してくれていると感じます。

助産師、看護師、保育士といった子育て支援の周辺でお仕事をされている方が、スキルアップすることの重要性。そして、より高いレベルの仕事をし、子育て支援の現場で活かしていく。それが、結果としてママ支援になり、子育て支援になり、子育て環境が向上する。そのための核となるのは、知識とスキルの修得だと、わたしは考えたのです。

今回の野中さんの発表は、一貫して「知識」がテーマでした。発表の中で「知らない自分を発見した」と言っていました。これは、ソクラテスの言うところの「無知の知」そのものであり、人が豊かに生きる知恵です。

知識は力になります。知識を得なければ、「自ら考える」スタートラインにさえ立てません。お母さんに限らず現代人には、“自ら考えることをせず、正解が得られればよし”とする風潮が確かにあると思います。パスカルが「人間は考える葦である」といったように、「考える」ことは、人間らしさであり、強さでもあります。これも、知識を得ることから始まります。こうした本質を、われわれは、子どもたちに伝えていかなければいけないと、改めて感じました。

ソクラテスとパスカルどちらも、私が、生きる本質を学ばせてもらった哲学者です。それを思い起こさせてくれる発表でした。

※ 大阪会場：ランチミーティング



※ 大阪会場：お悩みスーパーバイズ



I・Jグループ

兄弟姉妹の育て方について、同じ親が同じように育てているのに、育ち方には違いが出るのはなぜ？

グループの議論の中では、第一子は、待ちに待ったはじめての子どもなので、大事に育てるけど、第二子は、慣れもあって少し雑になるのではないかな。また、親の経験値や余裕のあるなしも関係しているのではないかな。また、第一子がイヤイヤ期のときに、第二子が生まれた場合、親の気持ちとして、第二子を大事にして、第一子をうとましく思うってしまうこともあるのではないかな。家系的に受け継いだ方針なども関係するのではないかな。

子どもに問題が生じたときに、「私の育て方が悪かった」と思う前に、そうした回避することの難しい影響も大いにあるということを知っているだけでも、子育てが楽になる。そして、そういう考え方を示唆してくれる人の存在や、そういう話を言い合える関係を持っていることが、重要なのではない

か、という結論になりました。

兄弟姉妹の子育てについては、古典児童心理学においても、さまざまな研究がなされていますが、まさにグループ内で検討されていたことが、当てはまります。第一子というのは、責任感が強く、社会の意をくむ性格になる。

末っ子は、自由奔放で、性格的にも安定していてマイペースな傾向があります。

真ん中子は、上と下の間で、いつも調整役を演じてきているので、バランス感覚が優れていて、あまり自己主張をしない性格になる傾向があります。

つまり、子どもの育ちというのは、育て方だけではないということです。同じ遺伝子

で生まれてきた兄弟姉妹を、同じ親が育てても、それぞれ全く違う個性で育つわけです。生まれた順番もあるし、家系的な方針もある、親子の相性だってあります。それにプラスして、その子の持つ生まれた個性が開花するわけなので、「育て方」ということで説明のつく話ではないのです。

では、「私の子育て」を振り返ったとき、何をもって「よし」とすればいいのか。それは、「アタッチメントを意識して子育てできていたか」ということではないでしょうか。愛情ある子育てができていたか、できていなかったか、という話ではなく、「意識できていたかどうか」が問題なのです。それができていれば、子育てを評価する必要は、どこにもありません。そして、最終的には「子どもは、なるようにしか育たない」という事実を受け入れればよいと思います。

これまで、わたしたちは「育て方が大事」ということを、言い過ぎたのかもしれない。どうにもな

らない外部要因だってあります。スマホやゲームのように、本当は子どもに触れさせたくないものでも、簡単には切り離せないものもあります。それも受け入れたうえで子育てしないといけない時代なのだと思います。だからこそ、本当に大事なことは、大事にして見逃さない態度が重要なのでしょう。



【集合写真】大阪会場



誌面で紹介しきれなかった他のお悩み in 大阪

- ◆ 園が導入したスウェーデンの幼児教育が、日本では馴染まないのではないか。
- ◆ 発達が心配な子が何人かいます。それを伝えたほうがよいのか、どう伝えればよいのか。
- ◆ お母さんにアタッチメントを伝えるうえで、何を大事にしていくとよいのか。
- ◆ 食育が注目される中、どうやったら、お母さん方に興味を持ってもらえるのか、どう伝えるとよいのかについて考えました。
- ◆ 仕事と子育てを、どうやって両立できるのでしょうか。



下記 URL より全文を見ることができます。

<https://www.naik.jp/blog/director/archives/1757/11>

宝塚大学 助産学専攻科

本専攻科は(社)日本アタッチメント育児協会より養成校としての認定を受けています。

確かな**助産技術**と
豊かな**人間性**を育む



大阪梅田キャンパス

- A 阪急「大阪梅田」駅茶屋町口より徒歩約 5 分
- B JR「大阪」駅より 徒歩約 10 分
- C 大阪メトロ「梅田」駅より 徒歩約 10 分
- D 大阪メトロ「中津」駅より 徒歩約 5 分



〒530-0012 大阪市北区芝田一丁目13番16号

【お問い合わせ先】 入試課

0120-580-007





第10回 育児セラピスト全国大会 in2019

大阪会場 参加者の声

毎回参加させて頂くごとに改めてアタッチメントの大切さ、素晴らしさを実感します。自分の中での気付きも沢山あり、今日のシンポジウムのお話の中で「10年先のことを見据えて」というところで、これからもアタッチメントを自分の生活や仕事、ライフワークにして生きていきたい!!と強く思いました。少しずつ自分も成長しながら、子育てされるお母さん、お父さん、皆さんにアタッチメントについて伝えていきたいと思います。ありがとうございました。

保育士 51歳 滋賀県

情報や悩みを皆様と共有することが励みになりました。沢山の情報が溢れる時代だからこそ、振り回されないためにも本当の情報、生の声を聴いて心に響くかを大切にしたいと思いました。アタッチメントの伝え方を再認識して、初心を忘れず、さらなる親子支援ができるように活動していきたいと思います。

保育士 60歳 佐賀県

愛着形成への理解を深めるとともに、様々な方と交流しコミュニケーションをとることができました。コミュニケーションの中でそれぞれの職種ならではの介入の仕方や考え方を知ることができ、自分の考えの幅が広がったように思います。また参加したいです。

学生 23歳 大阪府

活動されている方々にも最初にはつまづきがあったり、悩みがあって今があるということを知り、勇気もらいました。ありがとうございます。

公務員 32歳 福岡県

基調講演は、とても興味深い内容で、あっという間に時間が過ぎてしまっておどろきました。「園でも発達障害ではないかな」と思う子の問題の行動が年々増えてきていて、そのことについて、あてはまることが多く、勉強になりました。私だけでなく、職員全員が聞くことができたなら良かったと思いました。基本は、アタッチメントということを、改めて感じ、安全・安心の基地を持ち、子どもの保育を行っていききたいと思います。

保育教諭 51歳 岡山県

前日の講座に引き続き、講演では濃い内容を学びました。愛着障害について、前日の復習をしながら、タイプ、対応、支援について、更に知る！ことができました。「見立て」を立ててお話するとか、「横から」…も大事ですね。キーパーソンも重要です。これからの活動にも活かせることがたくさんありました。自分の娘にも。これまで対応してきた確認もできました。素晴らしい講演をありがとうございました。

児童厚生員 49歳 秋田県

スタッフ あとがき



太田 有香

今回も受付と物販を担当させていただきました。今回の物販ではこれまで登場していなかった「アタッチメント・ベアー」と「五感刺激ソフトブロック」を特別価格でご用意させていただきましたが、東京・大阪ともに完売になる人気ぶりでした。次回のご用意が未定となっておりますが、販売の際は事前にお知らせができたらと思っております。今回も沢山の刺激や気づきをいただき、本当にありがとうございました。



松尾 彰俊

今年度も両会場共に会場のセッティングやカメラマンとして参加させていただきました。東京会場においてはいつもとは違った会場ということもあり準備の段階であたふたしていた部分もありましたが、何事もなく全国大会が終わり安心しました。米澤先生の講演では皆さんの真剣さがカメラ越しでも伝わるような空気を感じました。来年度につきましても、皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。



塩澤 美月

今年も全国大会で皆様とお会いし、皆さまの想いやパワーを肌で感じる事ができ、とても嬉しかったです。

1年に1度しか直接お会いできない事が、とても残念です。ですが、また1年後、お会いできるので、来年の全国大会では1年間の活動の出来事などをお聞きできますこと楽しみにしています。皆様のご活動、応援しております！そして、ぜひ、ご活動された方は、いつでも事務局までご報告ください！お待ちしております！



梅原 礼子

今年も大阪会場の方にスタッフとして参加させていただきました。

数年前からシンポジウムの中で行っている「スーパーバイズ」ですが、会場が1つになるような空気を感じることができるこの時間が、私は大好きです。まだ、味わったことのない方は、ぜひ来年、会場で感じていただけたらうれしいです。今年もお忙しい中、ご参加いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。



竹内 典子

全国大会にご参加いただきありがとうございました。

今回嬉しいことがありました。初めて参加して下さった方から、来てみたら居心地が良かったと声をかけていただいたことです。おひとりご参加される方が大半ですので、安心してご参加いただけるように工夫しております。冬号はいかがでしたか。次回へのご参加のきっかけとしていただければ嬉しいです。



編集 後記

私事ですが、昨年3月に出産いたしました。平成31年は4ヶ月しかないので、少しレアだな、なんて思っています。子ども3人目ともなるとベテランママかと思いましたが、実際はそんなこともなく、毎日あたふたしております。心穏やかに育児をしたいです。(昨年も書いてる…!) 本年もどうぞよろしくお願いいたします。(福山)



日本アタッチメント育児協会 公式ブック



6歳までのアタッチメント育児

子どもを伸ばす愛情の表し方・与え方 8つのメソッド

廣島 大三 (著) / 合同出版 (出版)

標準価格：1,400 円 (税別)

親子の「アタッチメント (=愛着関係)」を育めば、子どもをもっと愛せる、子どもはもっと Happy! になる。親が親として成長し、ストレスがやりがいになる! 心やさしく、知的好奇心にあふれた、頭の良い子どもが育つ! アタッチメント育児に Let'sトライ! アタッチメント理論の基本概念から、親子の日常での営みの中でアタッチメントを育む具体的なメソッドまで。



アタッチメント・ベビーマッサージ

～感性豊かで幸せな子どもに育つ～

廣島 大三 (著) / 寺下 謙三 (監修) / 保健同人社 (出版)

標準価格：1,200 円 (税別)

赤ちゃんが生まれたら、ベビーマッサージを始めてみたい、と思っているお母さんは少なくありません。ベビーマッサージはオイルを使って、お母さんの手で赤ちゃんにマッサージをすることですが、大切なのは、お母さんと赤ちゃんの絆をしっかりと結ぶことです。本書では、発達心理学の観点から、お母さんと赤ちゃんのアタッチメント (愛着関係) をしっかりと作り、情緒豊かな「幸せな子ども」に育てるためのベビーマッサージを紹介します。

一般社団法人 日本アタッチメント育児協会の講座一覧

保育士や看護師、子育て支援施設など、育児にかかわる仕事に就業している方たちを主な対象として、下記のような講座を企画・運営しています。

■ インストラクターになるための講座

☑ **育児セラピスト 前期課程（2級）**を同時取得できます

アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター



お母さんにアタッチメントの大切さを伝え、豊かな母子関係を作るためのベビーマッサージを教える先生の資格です。

アタッチメント・食育 インストラクター



親が子どものために知っておきたい「心と体と知能を育むための食育」を、心理学・栄養学・歯学の観点から教える先生の資格です。

アタッチメント・ヨガ (for マタニティ&ベビー) インストラクター



妊婦さんとおなかの赤ちゃんの間のアタッチメント形成によって、出産や子育ての不安を取り除き、豊かな母子関係をつくるためのマタニティ・ヨガを教える先生の資格です。

あそび発達 インストラクター



0～3歳の心を育て、脳を育て、体を育て、その後の豊かな能力形成の土台を作るための「あそびと発達」を教える先生の資格です。

プレスクール・あそび発達 インストラクター



3～6歳という、知能形成とパーソナリティ形成において、その後も左右する重要な時期に、子どもの人生にとって最良の幼児教育としての「あそびと発達」を教える先生の資格です。

アタッチメント発達支援 アドバイザー



発達障害や発達グレーゾーンについての基礎知識を学び、そうした子どもたちの発達のために出来る具体的なメソッドを学び、お母さんにアドバイスや指導を行うための知識とスキルを身に付ける講座です。

子育てマインドフルネス インストラクター



いまや精神医学における心理療法としても注目のマインドフルネス。「子育てマインドフルネス」は、ヨーガ、瞑想法、呼吸法というだけでなく、脳科学や医学におけるエビデンスのもとに体系化しています。

■ アタッチメントを極めるための講座

New!

アタッチメント心理 カウンセラー

『アタッチメント』の成り立ちから最新研究まで網羅的に学びます。そのうえで、アタッチメント理論にもとづく心理療法「メンタライジング」を基にしたカウンセリング法を修得、愛着障害の子どもへの支援についても扱います。

■ 「育児セラピスト」になるための講座

育児セラピスト 前期課程（2級）



発達心理学やアタッチメント理論の基礎を学び、日常の育児や保育の現場で活かせる知識とスキルを学ぶ講座で、育児の専門家「育児セラピスト1級」取得のための基礎資格となる講座です。

育児セラピスト 後期課程（1級）



地域の子育て支援の現場において必要とされる「育児の専門家」として、根拠を持った育児指導やお母さんのメンタルサポート、育児を教える講座を企画できる知識とスキルを修得し、それを証する資格です。

育児セラピスト シニアマスター



「子育て」の域を超えて、「人生」という枠組みで、人の発達と成長を学ぶことで、自分の人生を再発見し、まわりの人たちの人生を見立て、あるいは、子どもだけでなく、親やその親の人生を見立てることで、人間関係を適性に導く役割を担うための資格です。

育児セラピスト トレーナー



講師や講演家として「教える・伝える・導く」スキルを専門的かつ実践的に学び、これまでに修得してきた知識とスキルを伝えるための資格です。後身の育成において活かせる資格であり、当協会の認定講師になるための基礎資格でもあります。

■ さらなるステップアップをするための講座

AKM アタッチメント・キッズマッサージ インストラクター



アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクターの上級資格であり、ベビーマッサージを卒業した1歳～6歳までのアタッチメントを育むためのキッズマッサージを教える先生の資格です。

AGM アタッチメント・ジム インストラクター



0歳～6歳の子どもの運動能力と、それに伴う知能、情緒の発達を目的とした、発達心理学と運動科学に基づく「親子体操」を教える先生の資格です。

■ 活動をさらに広げるための1DAY セミナー

教室運営力アップセミナー



大学認定養成校のご紹介

一般社団法人日本アタッチメント育児協会は、大学の正規カリキュラムに科目を提供し、大学の授業の中で、「育児セラピスト」や「ABM アタッチメント・ベビーマッサージ」「アタッチメント・ヨガ」などの各種資格を取得できる“認定養成校”を展開しております。現在、保育士養成校では、東京の淑徳大学短期大学部（2年制）と教育学部（4年制）、助産師養成校では、大阪の宝塚大学看護学部の2校3学部です。この制度は、大学、学生の双方にそれぞれ価値を提供しております。

Merit

大学にとっての価値

- 他大学の同学部・学科との差別化をして、独自の特徴を打ち出せる。
- 保育士、幼稚園教諭、保育教諭あるいは、看護師、助産師などの専門性をさらに高める資格を学生に提供できる。その結果、学生や親御さんが大学を選ぶ際の動機となる。
- 専願・併願ともに入学希望者が増加し、入試の競争力が高くなる。その結果、学力レベル（学校偏差値）が上がる

Merit

学生にとっての価値

- 保育士（幼稚園教諭、保育教諭）や看護師、助産師をはじめとする専門職が、現場で活用している資格を持って社会に出られる。⇒ 就職に有利
- 現職の方たちが学び、現場で活用している実践的な知識とスキルを、在学中に身につけることができる。⇒ 就活の面接に有利
- 資格取得に必要な科目を授業のなかで修得できる。⇒ 実費のみで資格の取得ができる

certificate

現在の認定養成校

- 淑徳大学（東京キャンパス）短期大学部 こども学科（2009年開始）
「ABM アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター」「育児セラピスト1級」
- 宝塚大学（梅田キャンパス）看護学部 助産学専攻科（2014年開始）
「ABM アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター」
「アタッチメント・ヨガ インストラクター」「育児セラピスト2級」

！2020年4月よりスタート！

- 淑徳大学（埼玉キャンパス）教育学部 こども教育学科
「ABM アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター」「育児セラピスト1級」

大学認定養成校について詳しくお聞きになられたい、あるいは、導入のご検討をされている関係者様は、ご連絡ください。

事務局 電話：052-265-6526 メール：info@naik.jp

法人研修・団体研修のご案内

資格講座の出張開催

- 関西看護医療大学 看護学部 様

助産、小児看護、母性看護などの先生（教授、准教授、講師、助教）8名向けに、『ABM アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター養成講座』を出張開催

- 福岡県子育て支援課 様

厚生労働省の緊急雇用対策事業における、福岡県基本的生活習慣修得支援員 14名向けに『ABM アタッチメント・ベビーマッサージ インストラクター養成講座』を出張開催

その他、大学や自治体、団体様からの依頼で、これまでに多数の出張開催を行っております。

職員・支援者のスキルアップ研修・講演

- 長崎県こども政策局こども未来課 様

子育て支援対策臨時特例交付金（安心こども基金）による「地域子育て創生事業」において、長崎県全県の保育士、子育て支援員 110名のベビーマッサージ研修を実施

- 日本保育協会・青森支部青年部 様

青森県内の 100名あまりの保育士の研修で、協会代表理事の廣島 大三が登壇

- 大阪府 泉佐野民間保育士会 様

泉佐野民間保育園勤務の保育士 203名に向けて、ベビーマッサージ研修を実施

その他、研修、講演実績は多数ございます。

お母さん向け教室・セミナーの開催・講師派遣

- 株式会社ファミリア 様

神戸本店にて、ABM アタッチメント・ベビーマッサージのレッスンを定期開催
オリジナルコンテンツ「パパと遊ぼう」を定期開催

- 高知大学 教育研究部医療学系看護学部門ペアレンティング・サポートチーム 様

「パパもママもアタッチメント育児をしよう～子どもを伸ばす愛情表現～」をテーマとしてワークショップ型セミナーを開催

原稿・コンテンツ執筆・監修のご案内

教室のオリジナルコンテンツ

- 株式会社ファミリア 様

神戸本店で定期開催する親子教室のオリジナル教室コンテンツ「パパと遊ぼう」を制作。

カタログ、誌面への原稿執筆・監修

- マテル・インターナショナル株式会社 様

フィッシャープライス・ブランドの知育玩具のカタログ、産院配布用リーフレットのコンテンツを、協会顧問理事の細井香が監修、執筆。



監修・発行：一般社団法人 日本アタッチメント育児協会

URL： <https://www.naik.jp> E-mail： info@naik.jp

〒460-0022 愛知県名古屋市中区金山 2-15-14 パックス金山 4F

TEL：052-265-6526 FAX：052-265-6529

・ 2019 年 12 月 26 日 第 1 刷発行